

目次

[令和5年度](#)

[令和4年度](#)

[令和3年度](#)

[令和2年度](#)

[令和元年度](#)

[現在の浅川幸子さんのご様子について（平成30年度）](#)

[平成30年度「事件から24年」に際して](#)

[平成29年度「事件から23年」に際して](#)

令和5年度

今年、母が亡くなり、今まであまり片付けることができなかった妹の遺品を一緒に整理していると妹の日記や写真が出てきました。小さい頃、家族旅行に行ったり、遊園地に行った時の、妹が元気な頃の笑顔や、家族みんなで七五三やバースデーを祝った時の写真はとても穏やかな気持ちでいられますが、事件後のベッドに横たわる姿や、父母が妹の頭をなでている写真を見ると、その時に戻って、憂うつになり、落ち込んでしまいます。

今年（2023年）入社した社員は、地下鉄サリン事件は現代史に少し載っていた程度で詳しくは分からない、ということでした。通勤時間帯の地下鉄にサリンをまいたこのテロ事件は、決して他人事ではないこと、アレフやひかりの輪にまだ入信する人がいることを伝えていかなければという気持ちが強くなりました。

現在の信者、これから入信しようとしている人は、宗教は人に被害を与えるものではないことをしっかり認識して、自分のとるべき道に進んでください。

（令和5年11月6日記）

令和4年度

私の妹、幸子が亡くなり今年はいはね忌を終える事が出来ました。

昨年同様、幸子は私達家族と一緒に過ごした日々は良かったのだろうか考えてしまうことがあります。しかし、ある方から「幸子さんが笑顔を見せた事が沢山あります。その時感じた事は、幸子さんがご家族と一緒にいらしてこのような穏やかな笑顔をされていたんだと、感じました。」とお話していただきました。その言葉は私達家族にとってはとても嬉しく、一緒にいて良かったと思いました。

それから、幸子の生きてきた証というか意味はどうだったのだろうかと思う事もあります。幸子の記録映画の作品を劇場で鑑賞させて頂く事があり、観にいらしていた方から「力をもらいました。」「自分達だけが介護で大変な思いをしているわけではない。」等、声を掛けてくださる人たちがおいでになりました。

改めて私達家族も幸子から、パワーを貰い助けてもらっていた事、家族の絆を深くしてもらった事に気付かされたのです。幸子の生きてきた意味が分かった気がしました。

現在もアレフ、ひかりの輪を信仰している人たち、関わりを保っている人達に自分の生きていく意味や証、又他人に迷惑をかけていないか改めて考え直して、家族、友人と話した上で、自分自身を見直してほしいと思います。

(令和4年12月25日記)

令和3年度

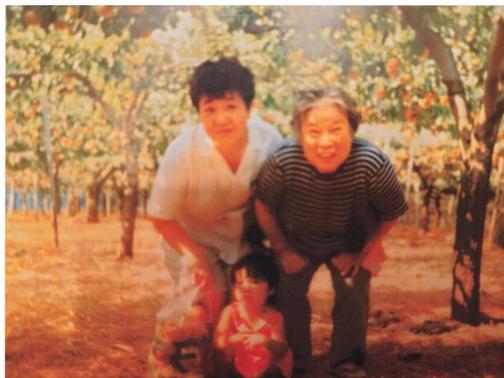
私の妹、幸子は地下鉄サリン事件から約25年、2020年3月10日に亡くなりました。

あれから1年以上たち思う事は、幸子は私達家族と一緒に暮らしたことは良かったのか？15年前に退院する時、お医者さんから「障害を持っている方は、介護に慣れている人をお願いをして、心のケアは一週間に一度施設に行ってお話しをしたりして和ませてあげるのがお互いの為に良いと思います。」といわれました。

でも、私達は自宅での介護を選びました。はたして幸子にとって家族と暮らしたことは良かったのか？楽しかったのか妹の真意はわかりませんが…。もっと何かしてあげられなかったのか？幸子にとってなにが一番よかったのか、いまだに自問自答しています。

今思うことは、「Aleph」、「ひかりの輪」等、前身のオウム真理教が過去にどのようなことをしたのか改めて見つめ直して下さい。

そして、自分たちが信仰していることで他人に迷惑をかけず、家族を悲しませるようなことはしないで下さい。



浅川幸子さん（左）（地下鉄サリン事件以前に撮影）（浅川一雄さん提供）

（令和3年12月17日記）

令和2年度

私の妹、浅川幸子は丸ノ内線中野坂上で心肺停止状態で救護され一命を取り留めましたが、その後は寝たきりになってしまいました。

2020年3月10日朝、入院先から連絡があり、急いで家族と病院へ向かいましたが、着いた時には、もう妹は亡くなっていました。

私は妹の耳元で、「幸子、本当に頑張ったね。お兄ちゃんは、人から頑張ってくださいと言われてこれ以上どれだけ頑張ればいいのかと感じたときから、ほかの人には頑張ると言わなかった。幸子にも、リラックスしてオウムなんか忘れよう、楽しくいこう、って話したよね。でも今は言うよ、幸子本当に、よく25年間頑張ったね。お疲れ様。そしてありがとう。」と言いました。

私たち家族は、つらい、悲しい、寂しい、言葉には言い表す事が出来ない思いをしました。

誰にもこのような思いをしてほしくありません。

オウムを信仰しているみなさん、もう一度自分の信じているものがどういったものなのか考えてください。

（令和2年11月5日記）

令和元年度

私の妹幸子は事件直後いつ死んでもおかしく無い状態でした。

当初は、私達家族は幸子の命さえ助かってくれさえすればと思っていましたが、その後に現実にぶつかります。幸子の洋服、バッグを警察から持って帰る、幸子名義のクレジットカードを停止する、警察の事情聴取、検察庁での聴取、入院の手続き、治療費の支払い、幸子の勤務先での手続き、労災保険、生命保険の手続き、医師との面接、転院、お見舞い、私の家族の心のケア、等々様々な事を考えながら生活をしていかなければいけませんでした。そして、事件に対し裁判で何から初めてよいかも分かりませんでした。まず幸子の勤め先の顧問弁護士から情報を得ましたが、明確な回答は得られませんでした。まして、刑事裁判、民事裁判の知識があるはずも有りませんでした。しかし、偶然にも新聞で弁護団の記事を目にし連絡をしました。

それからの日々は、裁判での傍聴、出廷、意見陳述等、このように非日常が日常になってしまいました。被害者というのは単に被害を受けた当事者だけの事ではなく家族も被害者になってしまいます。決して他人事や当事者だけの問題ではないのだと皆さんに知ってもらいたいと思います。

このような理不尽なテロ事件が二度とおきないように皆さんも過去の事と思わず忘れないでいてほしいと思います。オウム真理教は絶対的に許すことはできません。



浅川幸子さん（写真中央右、浅川一雄さん提供）



浅川幸子さん（写真中央、浅川一雄さん提供）

（令和元年 12 月 24 日記）

浅川幸子さんのご様子について（平成 30 年度）

浅川一雄さんは、浅川幸子さんの様子を知っていただき、地下鉄サリン事件の被害の深刻さを伝えたいとの強いお気持ちから、この度、幸子さんがお元気だったころの写真に加えて、幸子さんの最近の写真を提供してくださいました。



浅川幸子さん（浅川一雄さん提供）

平成 30 年度「事件から 24 年」に際して

今年一年を振り返ると、妹・幸子が入院をし一年以上が過ぎました。幸子の容態に大きな変化はありません。しかし、入院当初から口から食べ物が食べられずかなり痩せてしまいましたが顔色はとても良くなってきたと思います。病院では、固まってしまった関節を柔らかくする運動、車いすに座る為のリハビリを行っています。幸子は一生懸命に生きる努力を続けているのです。私たちはお見舞いに行き見守るだけです。面会をしていると幸子は何かを訴えようと口を動かすのですが声になりません。おそらく「家に帰りたい」と言っていると思います。

が、私はそのことには触れません。幸子が辛くなると思うからです。母も「幸子の容態はどう？」と常に気にしていますが今年 94 歳になる母は、ほぼ寝たきりなので面会は難しいです。

幸子の気持ちを考えると辛いと思うことがあります。この手記を読んでくださっている皆様、少しでも想像していただけますか？

20 年以上寝たきりで自分の意思が相手に伝わらず、食べたいものも食べられず、自分の自由がきかない辛さ、想像以上の過酷な状態なのです。その姿を見ている私たちは、悲しい思いではあるがあえて妹には、ネガティブな言葉を使わないようにしています。

なぜなら一緒に辛くなってしまったら幸子本人ももっとやりきれなくなってしまうと思うからです。私たち家族は幸子にとって良いと思うこと、楽しいと感じることをしてあげることが一番大切だと思っています。



浅川幸子さん（地下鉄サリン事件以前に撮影）（浅川一雄さん提供）

今年、地下鉄サリン事件の死刑囚の刑が執行されました。そのことによって私たち家族には何の変化もありません。刑が執行されたことで幸子が元に戻るわけでもなく、失われた23年が戻ってくることもありません。国は、平成の終わりを迎えるに当たって刑を執行することにより、地下鉄サリン事件を忘れようとしているのでしょうか？私たちは忘れさられてしまうのか。国は、犯罪被害者全ての人々の生活や心情にもう一度向き合ってほしいと思います。私も来年60歳になり定年を迎えます。体の衰えも感じ特に経済面が心配になっています。幸子の入院費用が年々負担になってきているからです。

私は、地下鉄サリン事件の真相は分からないままだと思っています。にもかかわらず、依然として「Aleph」や「ひかりの輪」に入会する信者がいる現実に脅威を感じます。第二第三のオウム事件が再び起こされては絶対になりません。国と行政に望むことは、地下鉄サリン事件の再発をさせない体制を確立してほしいと願うばかりです。

（平成30年12月28日記）

平成29年度「事件から23年」に際して

妹・幸子が被害を受けました。幸子は、事件当日、会社の講習会を受けるために乗車していた丸ノ内線内で事件に遭いました。

猛毒のサリンガスを吸ってしまい、心肺停止の状態に救護され、蘇生をしていただきました。いつ亡くなってもおかしくない状況でしたが、幸子の頑張りとお医者さんの力で命は助かりました。しかし、一生寝たきりの状態になってしまったのです。幸子は、事件から8年半の間で3か所の病院にお世話になり、平成15年9月13日に退院しました。その後、私たちと一緒に生活を始めました。



浅川幸子さん（手前右）（地下鉄サリン事件以前に撮影）
（浅川一雄さん提供）

事件から間もなく 23 年が経ちますが、私たち家族は、この度、大きな決断を強いられています。

平成 29 年 10 月、幸子は、けいれんを起こし入院しました。原因は、分からないとのことですが。今までは、ミキサー食を人の手を借りながらも口から食べることができていましたが、自力で飲み込むことができなくなりました。身体の硬直がひどくなり、顔が上に向いたままになってしまい、食事ができないのです。今後、どのようにして栄養を取っていくのかをお医者さんと私たち家族とで相談し、胃ろうにしました。胃ろうというのは簡単に言えば、胃に小さな穴を開けて、器具をつけ、栄養を直接、胃に入れるということです。胃ろうになったことでタンの吸引も行わなければいけないのですが、この時、幸子の顔がゆがみ、とても辛そうです。しかし、タンを吸引してあげなければ、窒息してしまうのです。

幸子は、まもなく退院しなければいけません。私たち家族は、幸子を家で見るか、別の病院や施設でお世話になるかの選択をしなければなりません。経済的なことも気掛かりです。一番辛いのは幸子だと言うことは理解していても、家で一緒に暮らしていけるのか？施設の方が良いのではないのか？タンの吸引、胃ろうの事など、心配は尽きません。お医者さんや病院の相談員からは「タンの量が多く、24 時間看護が必要なので、施設の方が良いのではないのでしょうか」とアドバイスをいただきました。それに、私と家内は仕事をしていますので、「自宅で介護するのは負担が大きすぎるでしょう」とも言われています。幸子の身体の状態を考えると、今後、私たち家族の生活環境は、大きく変化していくと感じています。

23 年は長い年月だと改めて感じました。平成 17 年に父が亡くなり、私たちの子供たちも家から巣立ち、93 歳になる母も、少しずつ老いが進んできました。

しかし、落ち込んでばかりではいけません。幸子が一生懸命生きようとしているのだから、私たち家族もしっかりサポートしていきたいと思っています。

(平成 29 年 12 月 22 日記)